

西谷啓治における清沢満之観

田村 晃 徳

西谷啓治の思索の中心に仏教、ことに禅が重要な位置を占めていることは周知の事実である。しかし、その一方で浄土教、特に親鸞を開祖とする浄土真宗に関しての論述、あるいは講演が多いことは存外注意されていないように思われる。だが、西谷の著述を読めば確認できるように、浄土教、親鸞に関してのコメントは実に数多いのである。今回は明治期における浄土真宗の再興者として知られる清沢満之について、西谷がどのように評価していたのかについて確認、そこから西谷が清沢という具体的人物を如何に認識し、その存在意義をどのように理解していたのかについて考察してみたい。

西谷は清沢を端的には次の様に評価する。

清沢先生はその要請から生まれた一個の宗教改革者であった。即ち一人で同時に信仰者・教学者・哲学的な弁証家・革新的な実践家であった。(『西谷啓治著作集』一八巻、二二六頁)

明治になり西洋からの思想の輸入、そして国内では廃仏毀釈と内外の出来事により、仏教界はそれまでの形態に反省を迫られた。その歴史的背景の中で、西谷は清沢の一生に「画期的な出来事」との評価を与える。その「画期」性とは「滅びに向かつて行き詰まりつつあるものが、未来に生きる可能性を見いだし得るような、また過去における自らの全歴史を再び伝統として蘇らせ得るような、新しい空間を開」いたことであった。それは、西谷の印象的

な比喩を用いるのであれば「仏教の泉」から「仏法の水」をもう一度吹きださせ、「近代人が飲めるように」(清沢満之とその宗教哲学)した点にこそ認められるのである。仏教の再生とは各宗派ごとの教理学、文献学の発達ではなく、仏教(西谷は浄土教のみではなく全仏教を指している点に注意したい)が宗教的生命力を再びよみがえらせる事に他ならない。西谷が宗教の神髄を「信仰」においた清沢に明治期に於ける重要な位置を与えるのも当然である。

しかし、西谷が清沢に見ていたものは明治時代に於ける意義のみではない。西谷が宗教、仏教を論じる際には常に現代の時代状況を視野に入れていた点を想起するのであれば、清沢論についてもその視点は該当するであろう。現代の危機的状況について西谷は幾度も述べているが、一つは「根本的な欠陥」が現代人の根底には潜んでいるとしている。これは自身の有限性に気づかず日々を生を送る人間共通に該当する事態であるから、それ自体は普遍性を持つ「欠陥」であり「虚無」である。しかし、近現代の状況をふまえる際にはそこに複雑な問題がからむ。それは、近代における「自我」の発見による「我」の立場である。我の拡張こそが近代の性格であるならば、ここでは自身の有限性、罪悪などが問われることは希薄となり、今までの宗教のようにただ罪を説くだけでは、近・現代の人間に相応するものとはならず、かえって遊離することとなる。

では、清沢のどのような点に現代的意義を認めていたのか。それは、端的に言うのであれば近代的信仰の確立者、との点である。近代的信仰とは西谷の言葉をかりるとき、近代人特有の「我」の立場を発展しつつも、その根底に潜む罪、有限性、つまり「虚

「無」を見失わせない立場である。清沢自身の文章に「如来」の定義として「無能の私をして私たらしむる能力の根本本体」という言葉があるが、ここに上記二つの立場が乖離することなく融合している信仰の告白を見ることが出来る。西谷は清沢の思想について、従来「自力」と言われていたものが清沢の「絶対他力」の概念に於いては「自力をして真に自力たらしめる」(「現代の虚無と信仰」という意味を有すものであるとしていた。

絶対他力ということは、そこで初めて本当の意味での自力の生活が正しい形でなりたち得るところということではないか。正しい形といったのは、つまりこの世を本当に生きぬく力が、そこから湧き上がってくるということだ。「如来は私に對する無限の能力である」というその如来から、生き抜く力が与えられるということでしょう。

(「清沢満之とその宗教哲学」現代しんらん講座三「一三三頁」) 　　そうであれば「この世を本当に生き抜く力」とは如何なる力か。それは「徹底した自力」に他ならずそれは「信仰」によってのみ成立するのである。

現実生活を生き抜くということ、それは自力ということの一番徹底した姿だと思ふんです。けれどもそういう風な自力、自分自身の生活力というのが、本当の意味で徹底した姿であらわれてき得るということは、実は絶対他力の無限な能力によって生かされるということだ、初めて可能になる。如来を信じて生きるという場で初めて成就することである。

(同前同頁)

この西谷の指摘は重要である。なぜならば、清沢の思想については常に批判が伴ってきたが、その代表的なものには清沢の思想を

内省にのみ向かわせる消極的なものとして批判するものである。例えば古くは清沢の主張を「羸弱思想」(境野黄洋)と性格付ける批判である。しかし、先の西谷の指摘によって再確認された清沢の思想は決してそのような性格ではないことは明らかである。西谷は清沢の宗教思想は決して消極的なものでなく、かえって最も積極的なものとも言い得ることを明らかにした。自身の有限性の自覚を通じつつも、絶望に陥ることなく、かえって新しい力を付与される。西谷は清沢の信仰には近代人の「虚無」の自覚と同時に「活動の全き自由」が与えられていることを看取したのである。この点に西谷の清沢論の特徴がある。それは現代、そして今後の日本の宗教状況において仏教が如何にして再び宗教的生命力を取り戻すのか、についての考察が清沢という歴史的に実在した人物を通じて為されているのである。

もちろん、清沢が西谷が指摘するような近代的虚無を直接的に感じていたのかは更なる考察を必要とするであろう。しかし、このことは逆に言えば、清沢の宗教の問ひ方、自己についての告白の描写、そこに内包する近代的性格と呼び得る側面を西谷は看取したのである。ここにこそ西谷の清沢観の独自性の一端がうかがえるのであり、西谷の清沢観によって清沢の近代的側面がより明瞭になったといえるのである。その考察により清沢が近現代の思想的状況においてより *visible* な、近現代の宗教思想状況における指南役を担える人物として明らかにされたのである。西谷の清沢論の意義はこの点にも求められる。

「根本的な欠陥」は現在も深刻であることに変わりはない。そのような中、私たちは西谷が清沢に見いだしていた「画期的出来事」をもう一度読み取らねばならないのではないだろうか。